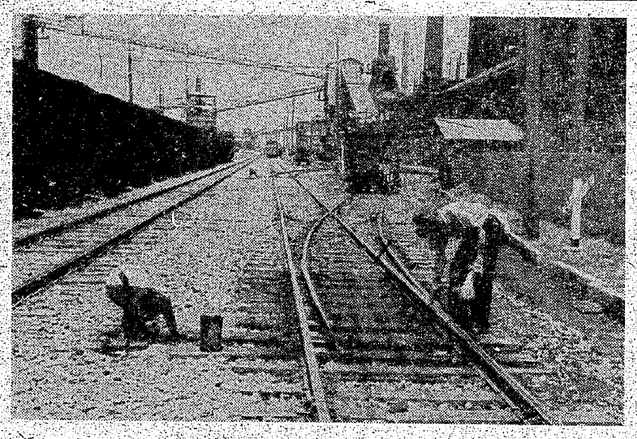
賃上げカボチャ

春闘を語る座

つけようなし家計簿

でも闘う以外に道なし



またまた合理化がおしよせる港務所の職場
（宮浦駅のポイント掃除）

妥結を報じる大正地域分会新聞「対話」

港務所また合理化提案か

広がる〝ZD〟運動

だが、さらけ出された矛盾

ついに四月一日問題の〝みなと木材〟を発足させることにより〝合理化を強行したばかりの三池港務所は、再び合理化提案の動きを見せているが、うち続く合理化によってでてくる矛盾――労働強化、低賃金釘づけ、差別などから港務労働者の職場・家庭における生活は、ますます苦しさを増している。

会社はこんな矛盾から労働者の目をそらし、そしてそのうえ資本の利潤拡大のために労働者をかりたてるために、いまZD運動を港務の全職場にもちこんでいる。

それでもZD運動は、こんな声を生みだしている。

「これまで会社がもうかるための提案を、相当やってきた。会社がよくなれば、こっちもよくなると思えばこそだった。ばってん、会社はよくなっても、こっちはよくなるところがますます悪くなるばかり。それに、以前はそれでも生産をあげるために提案することもあったが、もうこのごろではだれ一人集まってもそのタネが切れてしまった。まじめに考えれば考えるだけ、バカらしか」

中村さんの話

宮浦駅に信号手（といってもそれは名ばかりで、ポイントの掃除などの雑作業を押しつけられている人）として勤務する三池労組員の中村和民さん（48才、四井社宅）は語る。

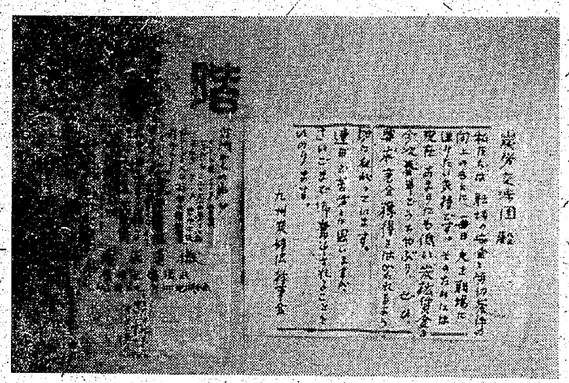
「会社のZD運動のねらいは、第一も第二もなく、組合そのものをまっ殺してしまおうとしているのですよ。組合がなくなると、誰に帰るほかはありません。

私は養成工あがりで、あの〝ごんぞう〟からやってきましたが、休み時間に折角休もうとしていると、係長が『おい中村ツ』と呼びます。『自転車ば入れとかんか』といいますから、外から室内に入れてやりますと、また『入れたなら、ちいっとどまでらんか』です。まさに奴隷でした。

私はまた戦争で、南方に海軍として転戦しまして、戦争の悲惨さ、侵略戦争の非人道性をいやというほど見てきました。いま不十分ながらも、平和と民主主義があります。どうして二度とこの日本を、また職場を昔に帰すことができますか。私は、だからたとえどんなにひどい低賃金と差別で苦しめられようと、港務所から逃げだすわけにもいきませんし、闘いをやめるわけにもまいりません。また新労組員の仲間とも、必ず手をにぎることのできる日がきます。そのときこそ、三池の労働者にも必ずしあわせがくるのだと信じています」

そういえば、中村さんの表情の明るさはどうだ。

× × ×



炭労本部にはられた激文。九炭婦協と三池宮原分会のもの（4月22日炭労会館にて）

子どもの苦労 見ると残念

池田　二番目の子どもの長男は、親のその苦労がよほど身にしみたのでしょう「自分はもう絶対に高校にはいかない」ときめまして、とうとう高校にはいかずじまいでした。

三男になって、うちの暮らしもいくらかは楽になりましたので、どうやら高校にすすむこともできましたけど、あのころの苦労を思いさえすれば、いまの苦労は何でもないですね。

野田　かあちゃんたちは、たしかに苦労しよりますな。それに子どもたちも。三池闘争からこっち、職場でのひどい差別のため低賃金がそのうえ安くなって、一人の子どもを育てていくのに、「どうしても食われん」からと坑内採炭の常一番勤務にまわり、「それでもまだ食われん」からと同じ採炭の三交代勤務にまわって働いたのが悪く、とうとうけい肺になってしまったわけですよ。

親父の死亡。続いて三池闘争がはじまりましたが、その間親父の退職金を食いつぶしながら、苦しい生活を切り抜けていきました。ちょうど一番末の弟が高校にはいったころ、親父の退職金もだいに食いつぶしてしまって、家には一銭の金もないところに追いこまれていったわけです。私はそのころ結婚したわけです。

それでも、新婚旅行にだけはいけました。もちろん、その費用も借金する以外にはなかったわけですばってん。その新婚旅行から帰って見ますと、家には一銭の金もなかったでしょうが。もう二人でボーナスとなってしもうたです。どうにも家計のやり繰りようがないというので、女房は実家に帰っていってしまいました。（大笑い）女房は何回か帰ってきては、また「やり繰りができなくなったから」といって家をでていきましたばってん、やっぱり私といっしょにいた方がよかつでしょうたいと、いまも家にいますけん。どこがよかつか、そらべんのところはようわからんですよ。（再び大笑い）

結婚したのは昭和四十三年でした。いまは弟も高校を卒業して就職したので、やっとひとまず借金ごつマスクもなかったということ。だし、岩粉が鼻に、息はされんごつまりよったといいますから、けい肺になるのも当たりまえですけどね。

問題にしよう賃金体系

――ところでこれまで、ことあれば「それなら閉山するぞ」で、どんなに苛酷な労働条件の下でも、文句もいえず抑えつけられてきた炭鉱労働者が、ことしはやく「閉山を恐れず」と、春闘への決意を固めたことが、山元代表は平和協定があるからというので四十八時間ストライキとなり、たとえその成果がわずかなものではあったが、第二組合・全炭鉱の先行妥結条件をはじめて乗りこえた回答をひきだすことができたわけです。いよいよストライキ突入というとき炭労中央から、「いよいよストをやるが、組合員の気持はどうですか？」と、電話で問い合わせてきましたが、こんな例はこれまでかつてなかったことでしたが炭労中央としてそれほど下部組合員大衆の決意を感じたのに違いないと思います。で、これからどう闘っていくかということですが？

立山　私は現在の賃金体系が問題だ、と思うとですよ。単価側がそれで、生産が上がれば、会社はすぐその単価を切りさげてくる。だから、前も後もいっちょん変らん。

しかも単価制が続く限り、せいいっぱいがまだまだ単価はあげようと、そっちの方にばかり目が向いて、春闘の方にはさっぱり向かんですもん、この単価制ばのうなかしていかんことには、前進でけんとじゃなかです。

残業に頼って命の切り売り

平川　坑外ではその単価制こそなかですが、残業があるとですよ。闘争前などは、会社はようこの残業ばさせよったですが、残業を百時間ばかりもやっていた者さえおったですよ。残業やることでそん月の賃金が、何しろ一万円も二万円も違いよったですから。とにかく残業を賃金にすりかえて考える合理化に頼ること、によって、生活をよくしようと考えてしまいます。頭のよい子、悪い子とでけますけど、どの子の気持もいっしょですね。

池田　私も残念に思っています。このくらいの賃上げでは、とても物価値上がりには追っつけません、しかし、岩粉が鼻に、息はされんごつまりよったといいますから、けい肺になるのも当たりまえですけどね。どの子の気持もいっしょですね。

前川　執行部に対する不満が強く、同じ全炭鉱のほかの組合が、こんどの春闘でストをやる態度を決定したとき、三池新労だけはつけ続けてがんばってまいりました。そして思うことは、やっぱり闘うのみということです。

――それでは、どうもありがとうございました。いくら闘いがきびしくとも、私たちは闘い抜く以外にないことがみなさんの話の中から明らかになったと思います。明日から、また来年の春闘で大いに力を発揮できるように、新労組のみなさんにも大いに働きかけお互いにがんばりましょう。

（以上）

やっぱり闘いあるのみ

池田　その第二組合員の人の心もやっぱり変りありませんね。同じ労働者ですもん。話しこんで見ますと、不平だらだらですね。

前川　執行部に対する不満が強く、同じ全炭鉱のほかの組合が、こんどの春闘でストをやる態度を決定したとき、三池新労だけは平和協定があるからというので四十ストをやらずに、組合員一人ひとりが三百円ずつカンパすることにしたのを、第二組合員の人たちは「三百円ずつだすより、ストやればよかつじゃん」と、批判が強かったですよ。

とにかく、炭労中央にのぞむことは、これからの春闘は本腰を入れてやってほしかと思います。山元にきて、一人ひとりの組合員とじっくり話しこんでもらうことですね。

野田　四十八時間ストライキに、たしかに力を感じました。自信をもって、組合員の前に「こうこうだった」と堂々と経過報告ができるようにあってほしいと思います。

それにしても労災補償が、ストとひきかえという点はどうしても納得がいかんですよ。人間のいのちに関する問題を取り引きの道具に供するやり方――これだけは絶対に改めるべきです。

松岡　とにかくいっぺんとま一万円くらいの回答をスパーッととれんもんでしょうか。毎年毎年要求の半分くらいをとっていっても、物価の方がうんとあがっていますから、折角の賃上げが賃上げにならんですもんね。

――いまの低賃金では、家計簿のつけようもなかでしょう、主婦にしても。

松岡　それでもやっぱり、私はつけています。たとえ家計が赤字でも、つけた方が安心できますから。第一、支払いなどで二重取りされることもありません。

池田　新聞代、ガス代などうっかりいたしますとよく二重取りされるんですよ。私も家計簿だけはつけ続けてがんばってまいりました。そして思うことは、やっぱり闘うのみということです。

――それでは、どうもありがとうございました。いくら闘いがきびしくとも、私たちは闘い抜く以外にないことがみなさんの話の中から明らかになったと思います。

明日から、また来年の春闘で大いに力を発揮できるように、新労組のみなさんにも大いに働きかけお互いにがんばりましょう。

（以上）

子どもたちこそ暮しの手本

――働いても働いても、親代々苦しんできた低賃金生活がいまもつづいている。これを、子どもたちはどう見ているでしょうか。

平川　正しく見つめてくれていますね。私のとろはまだ子どもたちが二人とも小学校ですが、選挙のときなんか子どもたちの間社はすぐその単価を切りさげてくる。だから、前も後もいっちょん変らん。

しかも単価制が続く限り、せいいっぱいがまだまだ単価はあげようと、そっちの方にばかり目が向いて、春闘の方にはさっぱり向かんですもん、この単価制ばのうなかしていかんことには、前進でけんとじゃなかです。

残業に頼って命の切り売り

平川　坑外ではその単価制こそなかですが、残業があるとですよ。闘争前などは、会社はようこの残業ばさせよったですが、残業を百時間ばかりもやっていた者さえおったですよ。残業やることでそん月の賃金が、何しろ一万円も二万円も違いよったですから。とにかく残業を賃金にすりかえて考える合理化に頼ること、によって、生活をよくしようと考えてしまいます。頭のよい子、悪い子とでけますけど、どの子の気持もいっしょですね。

池田　私も残念に思っています。このくらいの賃上げでは、とても物価値上がりには追っつけません、しかし、岩粉が鼻に、息はされんごつまりよったといいますから、けい肺になるのも当たりまえですけどね。

前川　執行部に対する不満が強く、同じ全炭鉱のほかの組合が、こんどの春闘でストをやる態度を決定したとき、三池新労だけは平和協定があるからというので四十ストをやらずに、組合員一人ひとりが三百円ずつカンパすることにしたのを、第二組合員の人たちは「三百円ずつだすより、ストやればよかつじゃん」と、批判が強かったですよ。

とにかく、炭労中央にのぞむことは、これからの春闘は本腰を入れてやってほしかと思います。山元にきて、一人ひとりの組合員とじっくり話しこんでもらうことですね。

野田　四十八時間ストライキに、たしかに力を感じました。自信をもって、組合員の前に「こうこうだった」と堂々と経過報告ができるようにあってほしいと思います。

それにしても労災補償が、ストとひきかえという点はどうしても納得がいかんですよ。人間のいのちに関する問題を取り引きの道具に供するやり方――これだけは絶対に改めるべきです。

松岡　とにかくいっぺんとま一万円くらいの回答をスパーッととれんもんでしょうか。毎年毎年要求の半分くらいをとっていっても、物価の方がうんとあがっていますから、折角の賃上げが賃上げにならんですもんね。

――いまの低賃金では、家計簿のつけようもなかでしょう、主婦にしても。

松岡　それでもやっぱり、私はつけています。たとえ家計が赤字でも、つけた方が安心できますから。第一、支払いなどで二重取りされることもありません。

池田　新聞代、ガス代などうっかりいたしますとよく二重取りされるんですよ。私も家計簿だけはつけ続けてがんばってまいりました。そして思うことは、やっぱり闘うのみということです。

――それでは、どうもありがとうございました。いくら闘いがきびしくとも、私たちは闘い抜く以外にないことがみなさんの話の中から明らかになったと思います。

明日から、また来年の春闘で大いに力を発揮できるように、新労組のみなさんにも大いに働きかけお互いにがんばりましょう。

（以上）